



quickly slow



惠賭 -keito-

夜更けのコンビニの白々しさは、夜に染まる街とは完全に切り離されている。ここには昼も夜もなく、ただ商品だけが月と太陽より早く入れ替わる。

男は先月から実家にほど近いコンビニで深夜バイトをしていた。推薦で入った大学を半年経たずに辞め、とりあえず時間を埋めるためのちょっとした繋ぎだった。

街道を外れた住宅地のマンションの一階にあるこのコンビニに、夜の客足はまばらだ。週末には夜更かしをする若いカップルや飲み過ぎて帰ってきたサラリーマンが店内を賑やかすこともあるが、平日ともなるとマンションの住民以外ほとんど客はやってこなかった。

そんな店で夜中二時過ぎになると一人でやってくる女がいる。いまのところ男が出勤した日はすべて来店しているから、毎日ここに来ているのかもしれない。

女は部屋着のようなラフな格好に長い髪をひとつに束ねていた。かなり若く見えたが単純に化粧っ気がないからかもしれず、女慣れしてない男には実年齢はわからなかった。雑誌を簡単に立ち読みし、コーヒー牛乳のパックをひとつ買っていく。代金は百五円ぴったりでレシートも受け取らずに店を出て行く。

この日もやはり二時を少し過ぎた辺りに女はやってきた。今夜はTシャツ姿ではなく、近くの公立高校のサマーセーターを羽織っている。この女がまだ高校生であることに男は軽い驚きを憶えた。

こんな時間に不健全ではないだろうか。そんな考えが頭をよぎった。だが別にこのマンションの住民ならば一階のコンビニに買い出しに来ることなど、目くじらを立てることもないのかもしれない。男は冷静に女を見つめ直した。そのセーターに縫い付けられた校章は男の母校でもあり、非常に見覚えのあるものだった。ほんのちょっとした共通点で、男は女に対する親近感がすっと湧いてくるのを感じた。

女はいつものように雑誌を眺めたあと、コーヒー牛乳のパックを握ってレジに向かってくる。商品をスキャナに通しながら、男は思い切って話しかけた。

女はいつも家族が寝静まるのを待っていた。自らの意志で引きこもっているものの、ずっと部屋にいるのはさすがに息が詰まる。いつからか人目を忍んで深夜に散歩するのが密かな日課となった。

今夜は少し肌寒い。女は腕を抱いてTシャツ一枚では心許ないと部屋を見回してみるものの、洋服はもう二年も買っていなかった。仕方なく箆笥の奥から高校時代のシャツとセーターを引っ張り出す。ほぼ三年間着古したセーターは思いのほか痛んでいて、裾がすり切れていた。それでも寝間着のスウェットよりましだろうと袖を通すと不思議と着心地は良く、さらりと肌に馴染んだ。

あと四ヶ月で卒業できたはずの高校を中退するのに特別強い理由があったわけではない。小さなことが積もり積もって、やがて看過できない漠然とした不安となって女にのしかかった。気づいたらもう辞める以外の逃げ道はなかった。女は小銭をポケットに入れて家を出る。世界は明るいうちは閉鎖的で、夜になってからやっと息がつけるくらいには広くなる。

真夜中のコンビニはとても人工的だ。まどろっこしい一切の日常を排除して、そこには彩り豊かに商品（アイコン）が並んでいる。

女はショーケースからコーヒー牛乳のパックを手を取った。いつも買う商品は決まっている。買う前にどれだけ悩んでも、最後には結局これを選んでしまう。冒険が苦手な性格なのだと女は思う。

それでも高校の制服を着てコンビニを歩いていると、昔に戻ったようで気持ちが良かった。時間帯こそ異なるものの、高校生の頃も毎日のようにコンビニに入り浸っていたのを思い出す。すり切れたセーターも、手に持ったコーヒー牛乳も、あの頃と変わらない。普段より若干浮ついた気持ちで商品をレジに持っていくと、その心を見透かしたように思いがけず店員が声を掛けてきた。

「遅くまで受験勉強？」

女はびっくりして店員を見遣った。この店の夜番はすべて憶えている。男は最近入ってきた新入りだった。この男の接客は丁寧でもなく、雑でもない。事務的で変に癖がないのが良かった。名札にはニシヤマとカタカナで書かれていて、実物より真面目そうな顔写真がこちらをまっすぐに見つめている。いままで気にも留めていなかったが、自分が高校の制服を着ているので不審に思われたのかも知れない。補導されるかとも思い、考えるより先に口が動いた。

「は、はい。あ、でも大学はもう推薦で決まっています……」

女が男についた最初の嘘。

とっさに出た台詞は二年前までの真実だ。高校を辞めてしまい、大学推薦の話もなくなった。素直に「はい」とだけ返事をしておけば良かったものを、無意識に推薦なんて言葉が出てしまったあたり、いまだ未練があるのだと女は思う。男は続けて言葉を発した。

「そう。実は俺も同じ高校通ってたんだ。どこの大学行くの？」

「……〇×大です」

「頭良いんだね。じゃあ春から東京？」

「……はい」

男はそれ以上は聞いてこなかったが、女は顔を上げられなかった。

袋は？

いりません。

百五円になります。

いつもどおり百五円ぴったりを支払う。女はまだ補導されるのではないかと肝を冷やしたが、男はただ興味本位で話しかけただけのようだった。立ち去るタイミングを見失って、普段は受け取らないレシートまで受け取ってしまう。

ありがとうございました。

接客を終えると男は興味をなくしたように後ろを向いた。女も出口に向かって歩き出す。女は頭のなかで男の質問を何度も反芻する。どう答えるべきだったのか。少なくとも、自分の答えでは合格点はもらえないだろう。男の声がいつまでも耳に残って、女はその日眠れなかった。

秋が過ぎ、年が明けた。

男はいつからか女が来るのを楽しみにしていた。陳列棚でコーヒー牛乳のパックを補充しているとき、雑誌の返品処理をしているとき、よく女のことを考える。好きなのかも知れない。そう思った。

いつも同じ時間に女がやってくると、わざとそっけないそぶりで会話を交わした。話題は有線で流れる音楽の話など、他愛のないものばかりだ。女は男が大学生だった頃の話を知りたがり、男は憶えている範囲で丁寧に問いに答えた。

女はあまり自分のことを語りたがらなかったが、たまたまレジの奥に飾られた店長が初詣の帰りに持ってきた破魔矢から、弓道で全国大会に進んで有名になった同級生の話がでてきた。男も同じような話を持ち出す。

「俺のときにもニコ上で超有名な弓道部の先輩がいたなあ。友だちが弓道部で、結構仲が良かったんだよ」

女は引きつった笑いを浮かべた。普段と違う笑顔に男は違和感をおぼえる。男はもう少しこの話題を続けたかったが、女は有線でかかっている音楽に話を変えた。

女と話をするのは愉しかった。だが、それも少しずつ終わりが近づいてきていることが男の心を曇らせていた。春になれば彼女は東京に行って、ここからいなくなってしまう。

推薦で大学に進む女が自分と同じ過ちを犯さないようにと願いながらも、自分が挫折した道を新しく歩み始める彼女に嫉みともつかない複雑な感情を抱いている。男は時間を浪費するだけのいまの生活がひどく自堕落なものに思えた。この好きという感情も女の輝きを羨んでいるだけじゃないのだろうか。男は戸惑う。恋など、もっとシンプルにできるはずだった。

初雪が降り、それから何度か雪が積もり、やがてまだ寒いながらも徐々に春の息吹が感じられる季節が訪れた。外の桜にはまだ蕾も見当たらないが、空気の質感が着々と春が近づいていることを教えている。

女は今夜をコンビニに行く最後の日だと決めていた。大学に行くために明日、上京することになっている。実際には行かないが、男に行くと言ったからにはその振りをしなくてはならなかった。いまさら嘘でしたとは、男を騙しているようで言いたくはない。

女はこの日のために通販で買った洋服に袖を通した。着慣れてないせいか、サイズの合わない他人の洋服を借りているような居心地の悪さがある。今までみたいに夜を自由に歩きまわれなくなるのは正直辛い。だが、嘘つき女だと蔑まれるのはもっと辛かった。

机上の手帳にはいままでに男から買ったコーヒー牛乳のレシートが丁寧に仕舞われている。女は手帳を開いてレシートの枚数を数えた。六十一枚あった。これが男と会話した回数だ。わずか六十一枚だったが、それはいままで過ごしてきた何十倍もある日々のどれよりも自分にとって価値あるものに思えた。男は自分が焦がれて、未練たらしく思っている道をあっさりと捨てた。そんな風に自分もすっぱりと割り切れたらよいのにと女は思う。もう自分を追い詰めるのにも疲れていた。

女はいつもと同じ時間にコンビニに足を踏み入れた。男は商品の棚を整理しながら何食わぬ顔で女がそばにやって来るのを待っている。コンビニの強く白い照明が男の顔を照らし出していた。名札の写真よりだいぶ髪が伸びていた。いまのほうが似合うと女は思う。

女は雑誌を見るときもなく眺めたあと、コーヒー牛乳を持ってレジに差し出し、「これ買うのも今日で最後だよ」と言った。男は何も言わず、商品をスキャンする。女はいつもと違って百十円をレジに出した。レシートと一緒に今夜はお釣りも受け取りたかった。男はレジからお釣りの五円とレシートを取り出し、女に差し出す。

特別なことは何もなかった。別れなんてこんなものかと淡泊な気持ちでレシートを受け取ろうとした女の手を、男は包み込むように触れた。女はびっくりして手を引く。お釣りの五円玉が床に落ちてからからと転がった。

「ごめん」男が謝る。

「あ……、いえ、こっちこそ……」

女の言葉は途中でかすれて消える。反射的に引っ込めてしまったが、避けるつもりはなかった。女は五円玉を拾って男に返した。

「ごめん。もう一回やり直して」

男は一瞬目を丸くして、それからもう一度同じように女にレシートとお釣りを手渡した。こわごわと指が触れる。今度は女も避けずにしっかりと受け取った。互いの手はいつまでも重なったままだった。

「……なあ、明日も来てくれないか」

男は重い空気を押しつけて言った。

「無理だよ。引っ越すんだもん」

女は男の手のひらを冷たいと思った。もっと温かくて柔らかいと思っていた。レシートごしにしか触れることのなかった指がいまはこんなにくっついている。

「嘘なんだろう。大学行くのって」

女は自分が凍りつくのを感じた。男の手のひらから残酷な冷気が伝わって、心を容赦なく痛めつけているのがわかる。

「そんなん、ちがっ」

女はこの場を離れようとしたが、男は力強く女を掴んで離さなかった。

「このあいだ二宮先輩に会ったんだ。知ってるだろう？ 弓道部の先輩。たまたま法事で帰省してたんだ。俺がここでバイトしてるって言ったら、このマンションに住んでる同級生の話をしてくれたよ」

「嘘……」

女は裏切られたと思った。いままで親身に話を聞いてくれていたのに、裏では自分の嘘を見破り、そのことを黙っていたのだ。

「普通に卒業してれば同じ大学に通うはずだったんだって？ 二宮先輩、心配してたよ。いままで話をしてくれて思ったことだけど、いまでも大学行きたいんだろ？ いまの生活を後悔してるんだろう？ 俺もさ、もう一回頑張ってみようと思うんだよ。だからさ、お前も頑張れよ。大検取ってさ、一緒に同じ大学に行こうぜ。同じ講義とって、学食で一緒に飯食って、なんか楽しそうじゃないか？」

女は答えることができなかった。男は言葉を続ける。

「明日、来るの待ってるから。来てくれたらうれしいけど、来なかったらすっぱり諦めてこのバイトも辞めるよ。俺がいたらお前が来づらくなるだろ。それは嫌だから。どっちでもお前の好きなほうを選んでくれよ」

言いたいだけ言って男は女の手を離した。

ありがとうございました、とやや他人行儀な挨拶でコーヒー牛乳が入ったレジ袋を女の手握らせる。女はされるがままレジ袋とお釣りを握りしめてコンビニを出た。レシートは手の中でくしゃくしゃになっている。

嘘がばれていたこと。

自分が後悔していること。

男に何もかもが見透かされていた。

いろんなことが一度に降りかかってきて、女は何も考えることができなかった。ただ涙だけが溢れた。

翌日、男は待った。コンビニの煌々とした真っ白い明かりが、真っ暗な空を照らし出している。彼女は来るだろうか。わからなかった。午前二時が近づいてくるとじっとしていても、心臓が爆発しそうに脈を打った。

来てほしいと願う。

だが別に来なくても良いとも思う。

どちらでも彼女の好きなほうでよかったが、それでもやはり来てほしかった。

二時半をまわった頃になって、ようやく自動ドアが開いた。

男は女が店内に入ってくるのを待った。すぐには声を掛けない。いつもと同じようにレジに来るまで待って、それからゆっくりと話をしようと思った。ここには朝も夜もなく、白い照明の下で、ただ二人の時間だけが流れている。

あとかき

.....楽しんで頂けましたでしょうか？

最後まで目を通して頂いた、すべての方に感謝をいたします。

2013/9/20 第一版 恵賭

コメントに感想など頂けると嬉しいです。